

論 文

麻薬で疼痛コントロールを行う頭頸部末期癌患者の 便秘異常(便秘)の実態と看護婦の認識について

浦西美智子・高山 祐子・島田 澄子・加藤 稚子・小藤 幹恵
(金沢大学医学部附属病院)

Management of constipation in patients with using narcotics
for pain of cancer in head and with terminal stage

Michiko Uranishi, Yūko Takayama, Shumiko Shimada,
Wakako Katou and Mikie Kofuji
Kanazawa University Hospital

要 旨

この研究は頭頸部末期癌患者の麻薬による疼痛コントロールのため起きる便秘の実態を調査し、望ましい排便ケアを検討するために行った。方法は麻薬による疼痛コントロールを受けた患者の看護記録、カルテ、三測表を資料とし、調査した。また、看護婦の麻薬使用患者の便秘に対する認識も調査検討し、以下の結論を得た。

1. 麻薬使用前と後の1カ月の平均排便間隔に有意差が認められた。
2. 麻薬使用後のトイレ歩行の可否による平均排便間隔に有意差が認められた。
3. 麻薬使用量と下剤使用量に相関が認められたのは、麻薬使用時と気管孔無し群の麻薬使用1カ月後であった。
4. 麻薬使用患者の排便コントロールに関して重要であると看護婦が認識していることは、患者の心身のコンディションに応じ、患者の意志を尊重しながら苦痛が少ない技術で個別的なケアを行うことであった。